

これも今は昔、ある人のもとに生女房のありけるが、人に紙乞ひて、そこなりける若き僧に、「<sup>1</sup>仮名暦書きて給べ」といひければ、僧、「やすき事」といひて、書きたりけり。始めつ方はうるはしく、神、仏によし、<sup>2</sup>坎日、<sup>3</sup>凶会日など書きたりけるが、やうやう末さまになりて、あるいは物食はぬ日など書き、またこれぞあればよく食ふ日など書きたり。

この女房、<sup>4</sup>やうがる暦かなとは思へども、<sup>5</sup>いとかう程には思ひよらず。さる事にこそと思ひて、そのままに違へず。またあるいは、<sup>6</sup>はこそすべからずと書きたれば、<sup>7</sup>いかにとは思へども、さこそあらめとて、<sup>8</sup>念じて過す程に、長凶会日のやうに、はこそすべからず、はこそすべからずと続け書きたれば、二三日までは念じ居たる程に、大方堪ふべきやうもなければ、左右の手にて尻をかかへて、「いかにせん、いかにせん」と、よぢりすぢりする程に、物も覚えずしてありけるとか。

<sup>1</sup> 平仮名の暦。暦は中国由来で漢語の行事が多く、それを僧が仮名に訳したのだろう。また、暦には、現代でも禁忌や行動のルールの記述がある。例えば大安吉日に結婚式をしたり、友引には火葬場が休みの風習が残っている。平安時代は今以上に吉凶を細かく定めていた。

<sup>2</sup> 変な暦だとは思うが

<sup>3</sup> とてもこれ程（変だ）とは思ひ寄らず

<sup>4</sup> 大便 はこを携帯トイレのようにに使っていた。（平中の失敗恋愛参照）